

『世説新語』と先行書

岡本洋之介

〔抄録〕

六朝宋の劉義慶が編纂した『世説』は、その書名を『世説新語』へと変化させつつ現在まで伝わる。本論は、この『世説新語』と、その成立以前に編纂された書との関連について述べることを眼目とする。

論述にあたって、まず文献の比較を行った先行研究を紹介した。次いで、『世説新語』の文章と内容・語句が一致・類似する先行書の文章を類書等から搜索し、未指摘例を挙げた。また、既指摘例であっても別に発見した記事がある場合は、増補とし

て挙げた。

このような一致・類似例は、先行研究及び筆者の発見を合計して約百九十にのぼる。これは『世説新語』全体の十七パーセント強に相当する。例の多くが佚文との比較検証であるという弱点はあるものの、『世説』のかんりの部分が先行書を利用して成ったと考えてよいと思われる。

キーワード…『世説新語』（『世説』）、先行書、利用

六朝宋の劉義慶が編纂した『世説』は、その書名を『世説新語』と

変化させつつも現在まで伝わる。本論は、この『世説新語』と、その成立以前に編纂された書との関連について、従来の指摘を踏まえつつ

述べることを眼目とする。なお、以下、本論では『世説新語』を『世説』と略し、原名を指して言う場合は、編者の名前をその前に置いて区別する。

『世説』は先行書から抜き書きしたものである、あるいは抜き書きした条があるとは、たとえば魯迅の『中国小説史略』¹や吉川幸次郎氏

の論文「世説新語の文章」²で主張された説である。特に後者は、劉孝標注に「義慶の材料となつたと覺しい文章が夥しく載つてゐる。」と指摘し、同一人物の呼称が一定しないことも抜き書きの証明として挙げる。

『世説』と先行書とがどのような関係を持つかについては、大矢根文次郎氏と阿部泰記氏とに、文献比較を行った研究がある。以下にその概略を紹介する。

大矢根氏の論文「世説の原據とその截取改修について」³は、『世説』の本文と、劉孝標が注として付した文章との対照を試みたものである。

氏はその方針を「本文の原據にちがいないと思うけれども、肝腎なことに、それらの書が誰の撰であるのか、また、何書的一篇であつたのか、不明なものも多い。これらは、一ように調査の対象からはずし、隋書經籍志などによって、繁雜冗漫ではあるが、その著が劉義慶の世説を採する以前のものだと確認しうるものだけを、見落とさぬように拾い、世説の文章との對比において、まず、その原據であることを推定して見たい。」と定め、劉義慶が原據文からどのように截取しどの程度の改修を加えたか考察する。さらに、賞誉第八130の記述が、「桓宣武表云々」という他の条とは異なる形で始まる例外を挙げ、「義慶は世説を採するばあい、一々その原據をことわらぬのが建てまえであつた。」と指摘する。

大矢根氏の論には、劉孝標がいかなる意図でその注を施したか考慮されていない、という難点がある。論に取りあげられた五十一例の中には、人物の字やその官職に就いていたことを紹介する注を原據とす

るような、強引な指摘も見える。

『世説』と先行書との関連について、大矢根氏とは別の切り口から調査を行ったのが、阿部氏の論文「世説新語の取材資料について——魯迅説に對する疑問提起」⁴である。

阿部氏は冒頭において、『中国小説史略』より「然世説文字、間或與裴・郭二家書（筆者注…『語林』『郭子』を指す）所記相同、殆亦猶幽明錄・宣驗記然、乃纂輯舊文、非由自造」という一節を含む箇所を引用し、「魯迅の言う『舊文』とは具體的にどういふ文章を指すのか今一つ不明であるが、劉孝標引く史傳を含めず、例擧した幽明錄・宣驗記の中、宣驗記が管干宝搜記や管張華博物志など同類の小説書から記事を採集していることから判断すると、世説新語についても先行する同類の小説書から記事を寄せ集めたのではないかと論じているようだ。」と述べる。そして、「世説新語と裴・郭二書の一致する記事數」を問題として取りあげ、「もし一致する記事數が少なければ魯迅の説は根據がなくなるのではあるまいか。」と疑問を提起する。なお、「裴・郭二書」と限定した理由は、「語林・郭子二書のほかに世説新語に先行するエピソード集が発見されない」点にある。

この疑問の解明のため、魯迅の『古小説鈎沈』⁵に採られた『語林』『郭子』と『世説』とを照らし合わせ、原據とみなし得る条を指摘する。さらに、氏が新たに発見した、他の史伝書から抜き書きしたと判断される例も紹介する。その結果から、「魯迅の言う『舊文』とは世説新語と同類の小説書の舊文であり、そこで語林、郭子二書所載記事を検討した結果、世説新語は確かに二書から若干の記事を採集しては

いるが、その数の少なさと他の史傳書にも世説新語と同じ記事が散見することから考えて、世説新語がすべての記事を先行のエピソード集から抜粋したとは考えにくく、直接史傳書からも記事を引いたと見るのが妥当である。」と結論づける。

阿部氏のこの論文にも難点がある。氏の検証は、魯迅説の妥当性への疑問を動機として行われた。しかし、そもそも、魯迅が『中国小説史略』において述べた「舊文」とは、阿部氏の主張するように「世説新語と同類の小説書」だけを指していると解釈すべきなのであろうか。

魯迅が『世説』を論じる際に取りあげた『宣驗記』が他の小説書から記事を採集しているからといって、魯迅が『世説』も同じく小説書のみから記事を採集したものと考えていた、とみなすのは性急であろう。阿部氏も自ら「具體的にどういふ文章を指すのか今一つ不明であるが」と言う。魯迅はある特定の分野の書を指して「舊文」と言っているのではあるまい。『宣驗記』は一例として挙げては過ぎない。

大陸、台湾では、『世説』と先行書との関連について、その点のみに言及した研究はないようである。余嘉錫の『世説新語箋疏』⁶では、劉孝標注、あるいは『語林』『郭子』やその他の先行書の文章と『世説』の本文とが一致する例を多く指摘する。その中には、清代の程炎震などの発見を孫引きした例も含まれている。楊勇の『世説新語校箋』⁷、徐震堦の『世説新語校箋』⁸でも、先行書と『世説』との一致例が報告されている。もともと、この三氏の研究においては、記事内容の一致を言うよりは、むしろ、『世説』本文の校勘・考証のため、別資料における記載例として紹介される場合が多い。

以上に挙げた研究には、それぞれ重複する例もある。しかし、阿部氏の論文内に楊勇の『世説新語校箋』と目加田誠氏の『世説新語』の名とが見えることを除いて、相互に参考した様子は看取されない。また、古田敬一氏の論文「類書等引世説新語について」¹⁰も『世説』と先行書の記述とが重なる例をいくつか指摘しているが、どの先行研究にも古田氏の言及を考慮した形跡は認められない。

二

これより以下、〈Ⅰ〉に筆者が新たに検出した例を挙げる（阿部氏の論には「掲載を控えた」例があるので、それと重なる可能性はある）。すでに指摘された例について、別に発見した記事がある場合は、〈Ⅱ〉に増補として挙げる。方法としては、『太平御覽』をはじめ、類書等から劉義慶『世説』に先立って成立した書の文章を搜索し、内容・語句が一致・類似する『世説』中の文章と対照する、という形をとる。¹¹

これとは別に、現在までに判明している例を比較検証し、①ほぼ一致する例（第一種）、②部分的に一致する例（第二種）、③内容の類似する例・異伝と思われる例（第三種）に分類して対応表を作成した。紙幅の都合上、①のみ末尾に添付し、第二種以下は数を記すにとどめる。

また、筆者は、『晋中興書』『統晋陽秋』（范曄）後漢書』を先行書とすることを保留する。劉義慶『世説』の成立時期を確定できない以

上、先に成つたと断言するわけにはいかないためである。ただし、対応表は、先行研究の指摘に限り、敢えてそのまま記載した。

なお、諸書は次のように略述する。

『太平御覽』⁽¹²⁾ 〓 『御覽』 『藝文類聚』⁽¹³⁾ 〓 『類聚』 『北堂書鈔』⁽¹⁴⁾ 〓 『書鈔』 『事類賦注』⁽¹⁵⁾ 〓 『事類』 『晋書 斟注』⁽¹⁶⁾ 〓 『斟注』

（Ⅰ）新たに検出した例

言語第二

52 庾法暢造庾太尉。握麈尾至佳。公曰、此至佳那得在。法暢曰、廉者不求、貪者不與。故得在耳。

語林曰、康法暢造庾公。捉麈尾至彼。公曰、麈尾過麗何以得在。荅曰、廉者不求、貪者不與。故得在耳。（『御覽』卷七〇三 麈尾）

『語林』の「彼」は「佳」の誤りと思われる。『世説』は「庾法暢」とするが、『高僧伝』卷四の記述から「康法暢」であると従来から指摘されていた。『語林』の記述もその説を裏付ける。『世説』の本文はやはり「康法暢」と改められてよいであろう。なお、楊勇は『御覽』のこの記事を『世説』と誤認している。

文学第四

66 文帝嘗令東阿王七步中作詩、不成者行大法。應聲便爲詩曰、煮豆

持作羹、漉菽以爲汁。其在釜下然、豆在釜中泣。本自同根生、相煎何太急。帝深有慚色。

魏志曰、陳思王植、年十餘歲、讀誦持論及辭賦數萬言、善屬文。太祖嘗視其文謂植曰、汝倩人耳。植跪曰、出言爲論、下筆成章。願當百試、奈何倩人。銅雀臺新成。太祖悉將諸子登臺、使各爲詩。植援筆立成。太祖異之。文帝嘗欲害植、以其無罪。令植七步爲詩、若不成加軍法。植即應聲曰、煮豆燃豆箕、豆在釜中泣。本是同根生、相煎何太急。文帝善之。（『御覽』卷六〇〇 思疾）

曹丕が七歩歩く間に詩を作るよう曹植に命じると、曹植はすぐさま豆と豆ガラを題材に用いて風刺の詩をなした、という話の主旨は同じである。しかし、『魏志』では、①曹植が無罪であると明言する点、②曹植の詩が四句である点、③詩を聞いた曹丕の態度が「善之」であつて「深有慚色」ではなかつた点が『世説』とは異なる。また、「陳思王く太祖異之。」の部分は劉孝標が注として引いている。劉義慶『世説』が採用しなかつた部分を意識的に引用した可能性がある。なお、劉孝標注と重なる前半部分は『三國志』の陳思王植伝に見えるが、『世説』の本文と重なる後半部分に関する記述は確認されない。

方正第五

43 孔君平疾篤。庾司空爲會稽省之。相問訊甚至爲流涕。庾既下牀。孔慨然曰、大丈夫將終、不問安國寧家之術、迺作兒女子相問。庾聞回

謝之、請其話言。

語林曰、孔君平病。因庾司空爲會稽省之。問訊甚至爲之流涕。孔慨然曰、丈夫將終、不問安國寧家之術而反作兒女相問。庾聞廻還謝之、請其話言。(『御覽』卷七三九 惣叙疾病下)

文字の異動は数カ所あるが、基本的に同じ内容である。ただし、『語林』には『世説』での「庾既下牀。」に相当する部分がない。

品藻第九

23 王丞相辟王藍田爲掾。庾公問丞相、藍田何似。王曰、眞獨簡貴不減父祖然曠澹處。故當不如爾。

郭子云、承指辟王藍田爲掾。庾公問丞相、藍田何以。王也。(『書鈔』卷六十八 掾)

『郭子』の「王也。」は意味が通じない。ただし、『書鈔』におけるこの表題が「王述簡貴」であることから、現行の『書鈔』では『世説』の「王曰」以下に相当する部分が失われている可能性が高い。

77 人有問太傅、子敬可是先輩誰比。謝曰、阿敬近撮王劉之標。

郭子曰、人問謝太傅、王子敬可與先輩誰比。謝荅曰、阿敬近王劉之

間。(『御覽』卷四四七 品藻下)

『郭子』における謝安の答えは「王劉之間」である。王献之は「王劉」の中間に近い、と言ったことになり、『世説』が「王劉之標」を撮るに近い、とするのとは異なる。また、「王」を王濛、「劉」を劉惔とする見方があるが、『御覽』には『郭子』を引いた末尾に「王脩與眞長。」という注が見える。

容止第十四

6 裴令公目王安豐、眼爛爛如巖下電。

語林曰、裴令公目王安豐、眼爛爛如巖下電。(『續談助』¹⁷卷四)

一致する。『語林』の成立が劉義慶『世説』に先立つ以上、『語林』のこの記述を原掾とした可能性は極めて高い。

11 有人語王戎曰、嵇延祖卓卓如野鶴之在雞羣。荅曰、君未見其父耳。

竹林七賢論曰、嵇紹入洛。或謂王戎曰、昨於稠人中始見嵇紹。昂昂然、若野鶴之在雞羣。(『類聚』卷九十 鶴)

『竹林七賢論』には『世説』に見える王戎の返答がない。しかし、逆に、嵇紹がどのような状況下にあった時に与えられた評価である

かについては、『世説』よりも詳しい。

棲逸第十八

6 阮光祿在東山。蕭然無事，常內足於懷。有人以問王右軍。右軍曰，此君近不驚寵辱。雖古之沈冥，何以過此。

王隱晉書曰，阮裕除東陽太守。尋徵侍中，不就，還剡山。有肥遁之志。有以問王羲之。羲之曰，此公近不驚寵辱。雖古之沈冥，何以過此。（『御覽』卷四四五 品藻上）

『王隱晉書』では、阮裕についての記述が『世説』よりも詳しい。王羲之の返答は同じである。なお、劉孝標は『阮裕別伝』を引いて「裕居會稽剡山，志存肥遁。」と注しており、『王隱晉書』の伝える点と一致する。

賢媛第十九

30 謝遏絶重其姊。張玄常稱其妹，欲以敵之。有濟尼者，並遊張謝二家。人問其優劣。荅曰，王夫人神情散朗，故有林下風氣。顧家婦清心玉映，自是閨房之秀。

語林曰，謝礪絶重其婦。張玄常稱其婦，欲以敵之。有濟尼者，並遊張謝二家。人問其二嫗優劣。荅曰，玄夫人神情散朗，故有林下之風。礪家婦清心玉映，自是閨房之秀也。（『御覽』卷四四六 品藻中）

『世説』では、謝礪（謝玄）と張玄はそれぞれ自分の姉と妹を評するが、『語林』では双方とも自分の妻を評している。それにもない、濟尼の答えも変化している。『語林』を原據として改修したのか、『御覽』の写誤か、あるいは『世説』と『語林』のどちらかの記事自体に誤りがあるのか、差異の生じた理由は不明である。なお、謝玄の妻も張玄の妻も誰であったのかは伝わらない。

任誕第二十三

5 步兵校尉缺。厨中有貯酒數百斛。阮籍乃求爲步兵校尉。

袁宏竹林名士傳曰，阮籍以步兵校尉缺，厨房中有數斛酒，乃求爲校尉。大將軍甚奇愛之。（『文選』¹⁸卷二十一 五君詠 阮步兵の注）

七賢傳曰，阮籍以步兵厨中有美酒，求爲步兵校尉。（『御覽』卷一八六 厨）

魏志春秋云，籍以世多故，祿仕而已。聞步兵校尉缺，厨多美酒，營人善釀酒，求爲校尉。遂縱酒昏酣，遺落世事。（『三国志』¹⁹卷二十一 王粲伝の注）

三例のうち、『袁宏竹林名士伝』の記述が『世説』の文章に最も近いと言える。

排調第二十五

35 郝隆爲桓公南蠻叅軍。三月三日會作詩，不能者罰酒三升。隆初以不能受罰。既飲，攬筆便作一句云，*娥隅躍清池*。桓問，*娥隅*是何物。荅曰，*蠻名魚爲娥隅*。桓公曰，作詩何以作蠻語。隆曰，千里投公，始得蠻府叅軍。那得不作蠻語也。

世語曰，郝隆爲桓公南蠻叅軍。三月三日作詩，不能者罰三升。隆初以不能受罰。既飲，覽筆便作其一句云，*娥隅躍清池*。桓問，*娥隅*是何語。荅云，*蠻名魚爲娥隅*。桓公曰，作詩何以爲蠻語。隆荅曰，千里投君，始得爲府叅軍。那得不作蠻語。（『御覽』卷二四九 府叅軍）

文字の異同は数カ所あるが、基本的に同一の文とみなせる。また、徐震堦は『御覽』のこの記述を『世説』と誤認している。

〔Ⅱ〕既指摘例の増補

德行第一

11 管寧華歆共園中鋤菜，見地有片金。管揮鋤與瓦石不異，華捉而擲去之。又嘗同席讀書有乘軒冕過門者。寧讀如故，歆廢書出看。寧割席分坐曰，子非吾友也。

魏志曰，管寧與華歆同學。歆聞車馬聲出門。寧割席曰，子非吾友也。

〔『御覽』卷四一〇 絶交）

阿部氏、徐震堦は『初学記』卷十七に見える『語林』を挙げる。特に阿部氏は、「これは初學記が後半を省略したか、世説新語が後半を別の文献から採集して前半と並記したのではないか」と述べるが、後半部分については『御覽』以上のような記述が見える。もつとも、話の主旨は同じながら、席を分けるまでの経緯を言う表現はかなり異なる。

16 王戎云，與嵇康居二十年。未嘗見其喜愠之色。

① 魏志春秋曰，康寓居河内之山陽縣。與之游者未嘗見其喜愠之色。（『三國志』卷二十一 王粲伝の注）

② 魏氏春秋曰，嵇康寓居河内。與之遊者未嘗見其喜愠之色。（『御覽』卷三八八 色）

①は『對注』で指摘されており、ここでは参考として挙げる。②の『魏志春秋』は①の記述を引用した可能性もあるが、文章の末尾に「世説同。」と注されている。

言語第二

23 諸名士共至洛水戲，還。樂令問王夷甫曰，今日戲樂乎。王曰，裴僕射善談名理，混混有雅致。張茂先論史漢，靡靡可聽。我與王安豐說延陵子房，亦超超玄箸。

竹林七賢論曰、王濟嘗解褌浴水。明日、或問王曰、昨遊有何語議。濟曰、張華善說史漢。裴逸民敍前言往行、袞袞可聽。（『類聚』卷四 三月三日）

竹林七賢論曰、王濟嘗解褌浴水。明日、或問王濟曰、昨日亦有何論議。濟曰、張華善說史漢。裴逸民敍前言往行、袞袞可聽。安豐侯道子房季札之間、超然玄著。（『類聚』卷五十五 談講）

余嘉錫は『御覽』卷三十の『竹林七賢論』を挙げるが、『類聚』にも以上のような記述がある。もともと、内容は同じ逸話を伝えるが、語句は混然として一致しない。

26 陸機詣王武子。武子前置數斛羊酪。指以示陸曰、卿江東何以敵此。陸云、有千里萐羹、但未下鹽豉耳。

郭子曰、陸機詣王武子。武子有數斛羊酪。指以示陸、卿東吳何以敵此。陸云、有千里萐羹、未下鹽豉。（『類聚』卷七十二 酪蘇）

字句の異同は数カ所あるが、基本的に同一の文とみなせる。なお、魯迅の『古小説鈎沈』では、『御覽』卷八五八・八六一、『書鈔』卷一三五の『郭子』を原據として挙げるが、『書鈔』の分については見当たらない。『斟注』、余嘉錫の指摘どおり、卷一四四とすべきである。

30 庾公造周伯仁。伯仁曰、君何所欣說而忽肥。庾曰、君復何所憂慘而忽瘦。伯仁曰、吾無所憂。直是清虛日來、滓穢日去耳。

世語曰、庾公造周伯仁。曰、君何所欣悅而忽肥。庾曰、君復何所憂慘而忽瘠。伯仁曰、吾無所憂。直是清虛日來、滓穢日去。（『御覽』卷三七八 肥）

一致する。ただし、古田敬一氏の『世説新語校勘表』²⁰は、『御覽』の覆鮑崇城校本の記述に基き、『世語』ではなく『世説』とみなしている。

92 謝太傅問諸子姪、子弟亦何預人事、而正欲使其佳。諸人莫有言者。車騎答曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於階庭耳。

語林曰、謝太傅問諸子姪曰、子弟何豫人事、而政欲使其佳。諸人莫有言者。車騎答曰、譬如芝蘭玉樹、欲使其生於庭階耳。（『御覽』卷九八三 蘭香）

余嘉錫は『類聚』卷八十一の『語林』を、阿部氏はそれに加え『類聚』卷六十四、『初學記』卷二十七の『語林』を挙げるが、『御覽』にも見える。「階庭」か「庭階」か、双方の記述は一定しない。どちらかが文字を逆転させているようである。

文字第四

67 魏朝封晉文王爲公，備禮九錫。文王固讓不受。公卿將校當詣府敦諭。司空鄭冲馳遣信就阮籍求文。籍時在袁孝尼家。宿醉扶起，書札爲之，無所點定，乃寫付使。時人以爲神筆。

竹林七賢論曰，魏封晉文王，王辭。公卿皆當喻旨。司空鄭冲馳使從阮籍求其文，立待之。籍時在袁孝尼家。宿醉，扶而起，書几板爲文，無所治定，乃寫付信。（『事類』卷十四 几）

東觀漢記，朝封晉文王爲晉公，備禮九錫。文王讓不受。鄭冲馳遣使從阮籍求其文。籍其時在袁孝尼家。宿醉，挾起作書，無所點定。時人以爲神筆。（『書鈔』卷一〇〇 歎賞）

『斟注』は『御覽』卷七一〇の『竹林七賢論』を、余嘉錫はそれに加えて『書鈔』卷一三三の『竹林七賢論』を挙げるが、『事類』にも見える。また、『書鈔』が引く『東觀漢記』は、『竹林七賢論』の記述よりも『世説』に近く、ほぼ一致する。ただし、『東觀漢記』は司馬昭が封爵を固辞した後の、公卿將校の対応を伝えていない。

雅量第六

2 嵇中散臨刑東市，神氣不變。索琴彈之，奏廣陵散。曲終曰，袁孝尼嘗請學此散，吾靳固不與。廣陵散於今絕矣。太學生三千人上書請以爲師，不許。文王亦尋悔焉。

竹林七賢傳曰，嵇康臨死顧視日影，索琴彈之。曰，袁孝尼嘗從吾學廣陵散，吾無惜，固不與。廣陵散於是絕矣。（『御覽』卷五七九 琴下）
竹林七賢傳曰，嵇康臨刑，顧視日影，索琴彈之。曰，袁孝尼嘗從吾學廣陵散，吾每靳固不與。廣陵散於是絕矣。（『事類』卷十一 琴）

余嘉錫、『斟注』は『三国志』卷二十一注の（嵇）康別伝を、大矢根氏は劉孝標注の『文士伝』を挙げるが、別に『御覽』『事類』が引く『竹林七賢伝』も指摘し得よう。これらの例にはない、太學生が上書した部分について、劉孝標は『王隱晋書』を注に挙げ、『斟注』は『書鈔』卷六十七の『王隱晋書』を挙げる。『世説』の文章は『竹林七賢伝』と『王隱晋書』を連結したようにも見える。あるいは別書が存在し、原據はそこに求められる可能性もある。

5 魏明帝於宣武場上，斷虎爪牙，縱百姓觀之。王戎七歲亦往看。虎承間攀欄而吼。其聲震地，觀者無不辟易頭仆。戎湛然不動，了無恐色。
竹林七賢論曰，王戎幼而清秀。魏明帝時於宣武場上爲欄鬪虎。使力士逆與之搏，縱人觀之。戎年七歲亦往觀焉。虎乘間薄欄而吼。其聲震地，觀者無不辟易頭仆。戎安然不動。帝於閣上見之，使問姓名而異焉。（『御覽』卷八九二 虎下）

竹林七賢傳曰，魏明帝於宣武場上爲欄鬪虎。使力士逆與之搏。戎年

七歳亦往觀焉。虎承間薄欄而吼。其聲震地，觀者無不辟易顛仆。戎安然不動。帝於閣上見之，使問姓名而異焉。（『事類』卷二十 虎）

『斟注』、余嘉錫、徐震堦は、『水経注』卷十六に引かれた『竹林七賢論』を挙げるが、同様の記事は『御覧』『事類』にも見える。明帝が王戎に名を問ひ尋常でないと認めた、と『竹林七賢論』が言う部分は、『世説』にはない。しかし、劉孝標が「竹林七賢論曰、明帝自閣上望見，使人問戎姓名而異之。」と注している。劉義慶『世説』と『竹林七賢論』を照合し、見えない部分を注として補足したように思われる。

賞誉第八

7 諺曰、後來領袖有裴秀。

王隱晉書曰、裴秀年十歳餘、時人謠曰、後進領袖有裴秀。（『類聚』卷十九 謳謠）

孫盛晉陽秋曰、裴秀有風操。十餘歳、時人爲之語曰、後進領袖有裴秀。（『文選』卷三十八 爲蕭揚州薦士表の注）

大矢根氏、『斟注』は劉孝標が引く『虞預晋書』を、阿部氏は『御覧』卷四六五の『王隱晋書』を挙げるが、『類聚』や『文選』の注にも同様の記述がある。ただし、どの例も「後進領袖」と伝え、『世説』

が「後來領袖」とする例だけが一致しない。

23 衛伯玉爲尚書令。見樂廣與中朝名士談議，奇之曰、自昔諸人没已來、常恐微言將絶。今乃復聞斯言於君矣。命子弟造之曰、此人人之水鏡也。見之若披雲霧觀青天。

①王隱晉書云、樂彥輔爲尚書郎。衛瓘見奇之、命諸子造焉曰、此人之水鏡。每見此人、瑩然若開雲霧觀青天。（『書鈔』卷六十 尚書諸曹郎）

②王隱晉書曰、樂廣爲尚書郎。尚書令衛瓘見奇之、命諸子造焉曰、此人之水鏡。每見令人、瑩然若披雲霧觀青天。（『類聚』卷一 霧）

徐震堦は『御覧』卷十五の『王隱晋書』を、余嘉錫、『斟注』はそれに加えて、『初学記』卷二・十二、『文選』卷三十注に見える『王隱晋書』を、大矢根氏は劉孝標注の『王隱晋書』を挙げるが、『書鈔』にも見える。ただし、他の指摘例と同じく、中朝の名士と談議していたことや樂広評の前半部分を欠く。諸書の引く『王隱晋書』同士は比較的一致することから考えれば、劉義慶『世説』は『王隱晋書』と別書とを利用した、あるいは別書に拠った可能性が高いように思われる。なお、余嘉錫、『斟注』は『初学記』卷十二と言うが、楊勇の指摘どおり卷十一が正しい。

規箴第十

8 王夷甫婦郭泰寧女。才拙而性剛，聚斂無厭，干豫人事。夷甫患之而不能禁。時其鄉人幽州刺史李陽，京都大俠，猶漢之樓護。郭氏憚之。夷甫驟諫之乃曰，非但我言卿不可，李陽亦謂卿不可。郭氏小爲之損。

郭子曰，王夷甫婦郭太寧女。才拙而性剛，聚斂無厭。夷甫患之而不能禁。時其鄉人幽州刺史李陽，景都大使，猶漢之樓護。郭氏甚憚之。夷甫驟諫之乃云，非但我言卿不可，李陽亦謂不可。郭氏乃爲少損。
〔御覽〕卷六二七 賦斂

〔斟注〕は『御覽』卷四九二の『郭子』を挙げる。余嘉錫も同様に指摘し「不全」と言うが、より多くの文章を有する記述が卷六二七に見える。『世説』は「郭氏小爲之損。」とするが、『唐写本世説新語殘卷』では「郭氏爲小損。」となっており、こちらの方がより『郭子』に近い。『世説』の本来の文章は「爲小（少）損。」であったとも考えられる。

容止第十四

2 何平叔美姿儀，面至自。魏明帝疑其傅粉。正夏月，與熱湯麩。既噉，大汗出，以朱衣自拭，色轉皎然。

何晏字叔平，魏時南陽宛人也。面恒似粧。文帝常疑之搏粉。時夏月，喚與熱湯餅。既噉，汗出，以朱衣拭面，轉更鮮潔。位至尚書。出魏志。〔瑠玉集〕卷十四 美人

この条について、阿部氏をはじめ多数の先行研究が諸書の引く『語林』との類似を指摘し、その記述から「明帝」は「文帝」の誤りだとする。『瑠玉集』の引く『魏志』もまた「文帝」とする。ただし、何晏の出身地や官位を言うなど、『語林』や『世説』とは異なる点が少ない。なお、現行の『魏志』にこの記述は見えない。

賢媛第十九

6 許允婦，是阮衛尉女，德如妹。奇醜。交禮竟，允無復入理，家人深以爲憂。會允有客至。婦令婢視之。還荅曰，是桓郎。桓郎者桓範也。婦云，無憂。桓必勸入。桓果語許云，阮家卽嫁醜女與卿，故當有意。卿宜察之。許便回入内，卽見婦，卽欲出。婦料其此出無復入理，便捉裾停之。許因謂曰，婦有四德。卿有其幾。婦曰，新婦所之唯容爾。然士有百行。君有幾。許云，皆備。婦曰，夫百行以德爲首。君好色不好德，何謂皆備。允有慚色，遂相敬重。

阮女，魏時阮伯產之。女適与許允爲妻。一交禮訖，允永不入。桓範語允云，阮女与卿，故當有意。君宜察之。允復強入。既見於婦，還卽欲出。婦便執之，不放。允曰，婦有四德。卿具幾。荅曰，新婦所乏唯容耳。然士有百行。君具其幾。荅曰，皆備。婦曰，丈夫百行以德爲首。君好色不好德，何謂皆備。允有慚色，遂雅相敬重。出魏志。〔瑠玉集〕卷十四 醜人

余嘉錫は『魏志』夏侯玄伝注の引く『魏志春秋』、『初学記』卷十九

の『郭子』を、阿部氏はそれに加えて『御覽』卷三八二、「白氏六帖」卷二十一の引く『郭子』を挙げるが、『調玉集』に見える『魏志』も同様の逸話を伝える。しかし、桓範がやって来た時の言動や許允をひきとめようとする阮氏の描かれ方は、『世説』に比べて簡潔である。なお、この記述も現行の『魏志』には見えない。

11 山公與嵇阮一面、契若金蘭。山妻韓氏覺公與二人異於常交、問公。公曰、我當年可以爲友者、唯此二生耳。妻曰、負羈之妻亦親觀狐趙。意欲窺之。可乎。他日二人來。妻勸公止之宿、具酒肉。夜穿墻以視之、達旦忘反。公入曰、二人何如。妻曰、君才致殊不如。正當以識度相友耳。公曰、伊輩亦常以我度爲勝。

竹林七賢傳曰、山濤與阮籍嵇康、皆一面契若金蘭。濤語妻曰、吾當年可爲交者、唯此二人耳。（『類聚』卷二十一 交友）

『斟注』は『御覽』卷四四四の、阿部氏は卷四〇九・四四四の『竹林七賢論』を、余嘉錫も程炎震による同じ指摘を挙げるが、『類聚』にも以上のような記述がある。もつとも、『世説』の前半部分のみにとどまり、山濤が妻の問いかけに答えるという形にはなっていない。なお、諸書の引く『竹林七賢傳』という著作は、たとえば『隋書経籍志』には見えない。『竹林七賢論』の写誤とも思われるが、正確なところはわからない。

巧藝第二十一

10 王中郎以圍碁是坐隱、支公以圍碁爲手談。

① 語林曰、王中郎以圍碁是坐隱、或亦謂之爲手談。（『水經注』³³卷二十 渠水注）

② 語林曰、王中郎以圍碁是坐隱、亦以圍碁爲手談。（『御覽』卷七五三 圍碁）

③ 語林曰、王中郎以圍碁是坐隱、支公以碁爲手談。（『類聚』卷七十四 圍碁）

①は余嘉錫の指摘であるが参考のため挙げた。それ以外に『御覽』『類聚』にも見える。③が最も『世説』に近く、①②では支遁の名が脱落しているのかとも思われるが、劉孝標もまた「語林曰、王以圍碁爲手談。」と注している。つまり、圍碁を「手談」としたのは、『世説』では支遁であるが、『語林』では王坦之と伝える場合もあり、現段階ではどちらとも判断を下し得ない。

寵礼第二十二

4 許玄度停都一月。劉尹無日不往、乃歎曰、卿復少時不去、我成輕薄京尹。

語林曰、許玄度出都、詣劉眞長。先不識、至便造之。一面留連、劉貴略無造詣、遂九十日一詣許。語曰、卿爲不去、家將成輕薄京尹。〔類聚〕卷五十 尹)

語林曰、劉眞長謂許玄度曰、卿爲不去、我將成輕薄京尹。〔類聚〕卷五十五 談議)

大矢根氏は劉孝標注の「語林」を挙げるが、「類聚」にも見える。もともと、逸話の内容は同じだが、劉悛の言葉以外の字句は「世説」と一致する部分に乏しい。

任誕第二十三

10 阮仲容、步兵居道南、諸阮居道北。北阮皆富南阮貧。七月七日北阮盛曬衣。皆紗羅錦綺。仲容以竿挂大布犢鼻褌於中庭。人或怪之。荅曰、未能免俗、聊復爾耳。

① 竹林七賢論曰、諸阮皆儒學富財。唯阮咸好酒家貧。俗七月七日曬衣。諸阮庭中並列綈錦。咸以長竿掛犢鼻布棍。人問之。曰、未能免俗、聊復爾耳。〔御覽〕卷六九六 棍)

② 竹林七賢論曰、阮咸字仲容、七月七日、諸阮庭中爛然、莫非綈錦。咸時總角、乃豎長竿、標大布犢鼻褌於庭中、曰、未能免俗、聊復爾耳。〔初學記〕卷四 七月七日)

③ 竹林七賢論曰、阮咸字仲容、籍兄子也。諸阮前世儒學、善居室、內足於財。唯籍一巷尚道業、好酒而貧。舊俗七月七日、法當曝衣。諸阮庭中爛然、莫非綈錦。咸時總角、乃豎長竿、標大布犢鼻褌於庭中、曰、未能免俗、聊復共爾。〔御覽〕卷三十一 七月七日)

④ 竹林七賢論曰、諸阮頗善居室、內足於財。唯籍一巷、好酒而貧。舊俗七月七日、法當曝衣。諸阮庭中爛然、莫非綈錦。籍兄子咸、時總角、乃豎長竿、標大布犢鼻褌於庭中、曰、未能免俗、聊復然耳。〔事類〕卷五 秋)

③は「斟注」の指摘であるが、参考のため挙げた。「世説」では阮咸の年齢に言及しないが、「竹林七賢論」では年少であったと記す。また、劉孝標は「竹林七賢論曰、諸阮前世儒學、善居室。唯咸一家尚道業事、好酒而貧。舊俗七月七日、法當曝衣。諸阮庭中爛然綈錦。咸時總角、乃豎長竿、挂犢鼻褌也。」と、「世説」の本文にない部分を注とする。劉孝標は「竹林七賢論」が利用されていることを察していたと考えられよう。

19 山季倫爲荊州、時出酣暢。人爲之歌曰、山公時一醉、徑造高陽池。日莫倒載歸、茗于無所知。復能乘駿馬、倒箬白接籬。舉手問葛疆、何如并州兒。高陽池在襄陽。疆是其愛將、并州人也。

襄陽耆舊記曰、襄陽城南有池。山季倫每臨此池、未曾不大醉而還。恒

曰、此我高陽池也。襄陽城中兒歌之曰、山公出何許、往至高陽池。日夕倒戴歸、酩酊無所知。時時能騎馬、到著白接離。舉鞭問葛強、何如并州兒。（『御覽』卷四九七 酣醉）

楊勇は「類聚」卷九の引く「襄陽記」を、「斟注」はそれに加えて「御覽」卷四六五の「襄陽耆舊伝」を、余嘉錫はさらに「水経注」の引く「襄陽記」を挙げるが、「御覽」にも見える。山簡の様子を歌ったのは、「襄陽耆舊記」では子供となっている。また、その詩の字句もやや異なる。劉孝標は「襄陽記曰、漢侍中習郁於岷山南、依范蠡養魚法作魚池。池邊有高隄、種竹及長楸、芙蓉、蒹葭、覆水。是遊燕名處也。山簡每臨此池、未嘗不大醉而還。曰、此是我高陽池也。襄陽小兒歌之。」と、「世説」に見えない部分を注としており、「襄陽記」が引用されていることを察していたと考えられよう。

排調第二十五

13 劉眞長始見王丞相。時盛暑之月、丞相以腹熨彈棊局。曰、何乃洵。劉既出、人問王公云、何。劉曰、未見他異。唯聞作眞語耳。

語林曰、劉眞長見王公。王公了不與語。時大熱、以腹熨石局。（『類聚』卷五 熱）

余嘉錫、楊勇は「御覽」卷三十四の「語林」を挙げるが「類聚」にも見える。ただし、後半に相当する部分がなく、「世説」や「御覽」

の引く「語林」とは字句も大きく異なっており、劉義慶「世説」が直接利用したとは認めがたい。

儉嗇第二十九

5 王戎女適裴頡、貸錢數萬。女歸。戎色不悅。女遽還錢乃釋然。

竹林七賢傳曰、王戎女適裴氏。乏用遣女爲貸錢數萬文而未還。女歸。戎色不悅。女遽還錢乃釋。（『御覽』卷八三六 錢下）

「斟注」、阿部氏は共に「御覽」卷三八八の「竹林七賢論」を挙げるが、卷八三六にも以上のような記述が見える。ただし、「竹林七賢伝」では、王戎の娘は裴頡に遣わされたと記されている。

汰侈第三十

2 石崇廁常有十餘婢侍列、皆麗服藻飾。置甲煎粉、沈香汁之屬、無不畢備。又與新衣、客多不能着。王敦爲將軍。年少往。脫故衣著新衣、神色傲然。羣婢相謂曰、此客必能作賊。

① 語林曰、石崇廁常有十餘婢侍列、皆佳麗藻飾。置甲煎粉、無不畢備。又與新衣、客多不能着。王敦爲將軍。年少往。脫故衣著新衣、氣色傲然。羣婢謂曰、此客必能作賊。（『御覽』卷一八六 廁）

② 語林曰、石崇廁置甲煎粉、沉香汁之屬。（『御覽』卷七一九 粉）

③ 語林曰、石崇廁有十餘婢侍列、莫不畢備。又與新衣出、客多羞不能如廁。王敦大將軍往。脫故衣着新衣、意傲然。群婢謂曰、此客必能作賊。〔御覽〕卷五〇〇 奴婢

③は「料注」の指摘であり、参考として挙げる。①～③の「語林」を比較すれば、「御覽」は、記事を採録する際、項目に沿う部分だけを抽出したり、文章を簡略化するようなこともあったと看取されよう。また、それぞれの脱落部分を補いあえば、「語林」と「世説」はほぼ一致する。ただし、①の「年少往」は「世説」にはなく、また、どのように解釈すべきかもわからない。

惑溺第三十五

3 賈公闔後妻郭氏酷妒。有男兒名黎民、生載周、充自外還、乳母抱兒在中庭。兒見充喜踊、充就乳母手中鳴之。郭遙望見、謂充愛乳母、即殺之。兒悲思啼泣、不飲它乳、遂死。郭後終無子。

王隱晉書曰、賈充子黎民三歲、乳母抱向閣。充入。黎民喜踊、充鳴之。充夫人郭槐遙望疑充、即鞭殺乳母。兒思母病死。槐又生男。向歲、乳母抱中庭、充過拈兒頰。郭又疑之、復鞭殺乳母。兒又死。充遂無嗣。〔御覽〕卷五二一 乳母

楊勇は「類聚」卷三十五の「王隱晉書」を挙げるが、「御覽」にも見える。「王隱晉書」での郭氏は、子供を産み、夫の賈充を疑い、乳

母を殺害するという行為をくり返しており、「世説」の伝える内容とは異なる。

三

劉義慶「世説」が利用したと思われる先行書の多くは佚文の形でしか伝わらない。よって、それらについては、字句がほぼ一致する例は別として、①劉義慶がもとの文章を加工して編纂した可能性、②もとの文章が現在まで伝わる間に變化した可能性などが考えられ、劉義慶「世説」と直接の関連があったと即断することはためらわれる。

しかし、いくつかの文字の異同があるものまで含むと、その合計は約百九十例にのぼる。これは、千百余条ある劉義慶「世説」の逸話の十七パーセント強に相当する数である。例の多くが佚文との比較検証にならざるを得ないという弱点を有しているが、やはり、劉義慶「世説」のかなりの部分が先行書を利用して成ったと考えてよいのではないだろうか。

また、「語林」「郭子」の一致数が群を抜く点が注目されるが、何故であるのかは残念ながらわからない。両書は「隋書經籍志」において劉義慶「世説」と同じく小説家に分類されているが、そのことは直接の理由とはなり得ないであろう。なお、「郭子」の作者である郭澄之は東晋末の人物で、劉裕に仕えている。年代から言えば劉義慶に近いのだが、関係の有無は伝わっていない。

注

- (1) 『魯迅全集』第九卷所収 魯迅全集出版社 一九四六
- (2) 東方學報 京都 第十冊第二分 東方文化研究所 一九三九・七八六〜一九九頁 後に『中国散文論』 弘文堂 一九四九 六六〜九一頁、『吉川幸次郎全集』第七卷 筑摩書房 一九六八 四五四〜四七二頁に所収
- (3) 東洋文学研究第九号 早稲田大学東洋文学会 一九六一・三三五 五六頁 後に『世説新語と六朝文学』 早稲田大学出版部 一九八三 一〜二八頁に所収
- (4) 山口大学文学会誌三十四号 山口大学文学会 一九八三・十二 一五〜一三三頁
- (5) 『魯迅全集』第八卷所収 魯迅全集出版社 一九四六
- (6) 余嘉錫箋疏 上海古籍出版社 一九九三(修訂本)
- (7) 楊勇著 宏業書局 一九七一
- (8) 徐震堦著 中華書局 一九八四
- (9) 目加田誠著 明治書院 一九七五〜七八(新釈漢文体系七十六〜七十八)
- (10) 広島大学文学部紀要三 広島大学文学部 一九五二・十二 一四五〜一六六頁
- (11) 『世説』は四部叢刊所収の袁氏嘉趣堂本を使用した。
- (12) 中華書局 一九六〇
- (13) 中華書局 一九五九
- (14) 天津古籍出版社 一九八八
- (15) 中華書局 一九八九
- (16) 成文出版社 一九七一
- (17) 十萬卷樓叢書所収
- (18) 中華書局 一九七七
- (19) 中華書局 一九五九
- (20) 古田敬一著 広島大学文学部中国文学研究室 一九五七
- (21) 『書目』第一九三号 東洋書道協会 一九六八

- (22) 古逸叢書所収
- (23) 四部叢刊所収
- (24) 中華書局 一九六二

『世説』と、利用したと思われる文献の対応表

第一種(『世説』とほぼ一致する例)	59	阿部：御469の郭子	余嘉錫：御469の郭子		
德行第一	22	阿部：御642・820の郭子	阿部：類64・81、初27の語林		
37	阿部：御39(発見されず)・706・911、	書12・133、続談助4の語林	余嘉錫：類81の語林		
38	阿部：御412の晋中興書	言語第二	岡本：御983の語林		
17	阿部：御464の語林	余嘉錫：御464の語林	96	阿部：御983、文選60注の語林	
20	阿部：御188の郭子	古田：御464の語林	9	阿部：御499の郭子	
21	阿部：御188・899の郭子	古田：御188・899の郭子	政事第三	22	阿部：御707、類70の郭子
26	阿部：御858・861、書135(発見されず)の郭子	余嘉錫：御858・861の郭子	文学第四	18	阿部：御209・390の衛玠別伝
30	阿部：類72の郭子	對注卷54：書144の郭子	楊勇：御209・390の衛玠別伝	余嘉錫：御209・390、類19の衛玠別伝	
43	阿部：御378の世語	岡本：類72の郭子	31	阿部：御390・703、書134の郭子	
53	阿部：御385・464・467・518・924、類87・91、六帖20・99の郭子	余嘉錫：御385・464・528(518の誤り)の郭子	44	阿部：統談助4の郭子	
52	阿部：御703の語林	楊勇：御385・528(518の誤り)の郭子	53	阿部：御229・617、書67、類46の郭子	
53	阿部：御702、類69の語林	余嘉錫：御702、類69の語林	63	阿部：御367、類17の郭子	
53	徐震堦：御702の語林	徐震堦：御617の郭子	67	阿部：書100の東觀漢記	
			93	阿部：御695、書129の郭子	
			13	阿部：御706、書133の郭子	
			18	阿部：御388の郭子	

- 余嘉錫：御388の郭子
阿部：御489の郭子
余嘉錫：御489の郭子
阿部：御428・492の郭子
郭注卷98：御428・492の郭子
- 26 余嘉錫：御489の郭子
阿部：御428・492の郭子
郭注卷98：御428・492の郭子
- 43 岡本：御739の語林
阿部：御490・739の郭子
余嘉錫：御490の郭子
雅量第六
- 1 阿部：御753の語林
徐震堦：御753の語林
- 6 阿部：御820の戴逵竹林七賢論
阿部：御389の語林
阿部：御393・699の郭子
徐震堦：御393・699の郭子
識鑿第七
- 2 阿部：魏志裴潜伝
阿部：御568、書110（112の誤り）、初15の郭子
郭注卷79：書112の郭子
- 賞譽第八
- 5 阿部：御445の王隱晋書
余嘉錫：御445の王隱晋書
大矢根：劉孝標注の虞預晋書
阿部：御465の王隱晋書
郭注卷35：劉孝標注の虞預晋書
岡本：類19の王隱晋書
文選38為蕭揚州薦土表注の孫盛晋陽秋
- 15 余嘉錫：御953の王隱晋書
阿部：統助談4の殷芸小説引裴頠別伝
- 18 阿部：事類賦注15の語林
徐震堦：文房四譜1の語林
阿部：御206の語林
余嘉錫：御206の語林
- 20 阿部：御447の郭子
余嘉錫：御447の郭子
- 54 阿部：御447の郭子
余嘉錫：御447の郭子
徐震堦：御447の郭子
阿部：御393・703、書134の郭子
余嘉錫：御393・703の郭子
徐震堦：書134の郭子
楊勇：御393の郭子
郭注卷77：御393の郭子
阿部：御255の郭子
余嘉錫：御255の郭子
- 60 阿部：御255の郭子
余嘉錫：御255の郭子
*大矢根：劉孝標注の語林
阿部：劉孝標注の語林
*大矢根：劉孝標注の桓温平洛表
阿部：御405の郭子
郭注卷98：御405の郭子
阿部：御444の郭子
余嘉錫：御444の郭子
阿部：御447の郭子
阿部：書148の郭子（鄭子と記す）
阿部：御447の郭子
品藻第九
- 3 阿部：蜀志龐統伝注の晋張勃異録
徐震堦：蜀志龐統伝注の晋張勃異録
阿部：魏志陳泰伝
楊勇：魏志陳泰伝
阿部：魏志陳思王植伝注の荀綽冀州記
御409・444の郭子
- 7 阿部：魏志陳思王植伝注の荀綽冀州記
余嘉錫：魏志陳思王植伝注の荀綽冀州記
州記
徐震堦：魏志陳思王植伝注の荀綽冀州記
御409・444の郭子
- 20 阿部：魏志陳思王植伝注の荀綽冀州記
阿部：御447の郭子
- 徐震堦：御447の郭子
阿部：御445の王隱晋書
阿部：統助談4の郭子
阿部：御447の郭子
阿部：書107の郭子
阿部：御447の郭子
阿部：御447、類22の郭子
岡本：御447の郭子
阿部：御447の郭子
規箴第十
- 4 阿部：広461の語林
徐震堦：広461の語林
余嘉錫：御492の郭子
郭注卷43：御492の郭子
岡本：御627の郭子
阿部：類66の郭子
余嘉錫：御492の郭子
豪爽第十三
- 4 阿部：書135の語林
郭注卷98：書135の語林
楊勇：書135の語林
容止第十四
- 1 阿部：御440（444の誤り）、779の語林
御93の晋郭頒世語
徐震堦：御79の語林
阿部：御21・154・365・379・387・860、雜9、初19・26、書128・135、事類賦注4の語林
- 2 阿部：御21・154・365・379・387・860、雜9、初19・26、書128・135、事類賦注4の語林
徐震堦：御21・365の語林
目加田：書135の語林
楊勇：初10の魚豢魏略
御61（發見されず）、379、書128・135の語林
- 3 阿部：御447の郭子
岡本：統助談4の語林
阿部：御380、初19の郭子
- 9 阿部：御447の郭子
御61（發見されず）、379、書128・135の語林
- 阿部：御219（216の誤り）、392、六帖
62、類19・94の郭子
- 15 阿部：御803の語林
阿部：御803の語林
阿部：御447の郭子
阿部：御366の郭子
阿部：書70の郭子
企羨第十六
- 1 阿部：御394の郭子
余嘉錫：御394の郭子
徐震堦：御394の郭子
傷逝第十七
- 10 阿部：御393・703、書134の郭子
郭注卷93：書134の郭子
賢媛第十九
- 7 阿部：御859、類48、書60・144の郭子
余嘉錫：類48の郭子
阿部：魏志夏侯玄伝注の魏氏春秋
余嘉錫：魏志夏侯玄伝注の魏氏春秋
楊勇：魏志夏侯玄伝注の魏氏春秋
余嘉錫：御441の語林
阿部：御409・444の竹林七賢論
余嘉錫：御49（409の誤り）、444の竹林七賢論
- 11 阿部：御409・444の竹林七賢論
郭注卷43：御444の竹林七賢論
岡本：類21の竹林七賢論
阿部：御446の語林
岡本：御446の語林
巧藝第二十一
- 10 余嘉錫：水経注22注の語林
岡本：御753、類74の語林
任誕第二十三
- 3 郭注卷49：御480の竹林七賢論
阿部：文選21の五君詠注の晋孫盛晋陽秋
- 7 阿部：御219（216の誤り）、392、六帖
62、類19・94の郭子

- 21 阿部：御92の郭子
 辭注卷49：御92の郭子
 初26、類26・48、書148の
 晋中興書
- 31 阿部：御595、類58、書103の語林
 余嘉錫：御595、書103の語林
 楊勇：御595、書103の語林
 辭注卷77：御593(595の誤り)、書103
 の語林
- 32 阿部：御249、書107の郭子
- 43 阿部：御389・552、書92の語林
- 46 阿部：御389の語林
 辭注卷80：御389の語林
- 47 阿部：御12、類2、初2、事類賦注
 3の語林
- 48 阿部：書148の郭子
 辭注卷80：御12、類2の語林
- 52 阿部：書148の郭子
 簡傲第二十四
- 4 阿部：広235の語林
- 5 阿部：御389の郭子
 辭注卷80：御249の世語
- 13 排調第二十五
- 7 大矢根：劉孝標注の張敏集載頭賁子
 羽文
- 8 阿部：御391の郭子
 余嘉錫：御391の郭子
- 13 徐震堦：御34の語林
 楊勇：御34の語林
- 34 阿部：類5の語林
 阿部：御617、類55、書98の郭子
 徐震堦：御617、類55、書98の郭子
- 35 岡本：御249の世語
- 52 阿部：書98の郭子
 輕詆第二十六

4 阿部：類6、六帖3の郭子
 假譌第二十七
 4 阿部：御707の語林
 黜免第二十八
 5 阿部：初24の郭子
 儉書第二十九
 5 阿部：御388の竹林七賢論
 辭注卷43：御388の竹林七賢論
 岡本：御836の竹林七賢傳
 7 阿部：御431の郭子
 汰修第三十
 2 辭注卷98：御500の語林
 岡本：御186・719の語林
 惑濁第三十五
 4 阿部：御652、類35・52の郭子
 7 阿部：御212の郭子

〔注記〕
・各篇の条の番号は、徐震堦の『世説新語校箋』に準拠した。番号が先行研究と異なる場合は、「*」を付して改めた。
・余嘉錫、徐震堦、楊勇の指摘分は、『世説』と文章が同じであると指摘する場合の他、本文との考異に先行書の記事を引いている場合も例に含めた。また、著者本人の発見によらない指摘についても例に含めた。

・阿部氏が出典を示さない条については、氏が考証の対象とした魯迅の『古小説鈎沈』の『語林』『郭子』に挙げられた出典を記している。なお、本表の阿部氏の欄において出典先の巻数を訂正した例は、『古小説鈎沈』の誤記に原因があることを付言しておく。

- ・それぞれ、以下のように表記を省略した。
- 『太平御覽』 〓 御 『北堂書鈔』 〓 書
 - 『藝文類聚』 〓 類 『類林雜説』 〓 雜
 - 『三國志』 〓 三國 『太平広記』 〓 広
 - 『白氏六帖』 〓 六帖 『初學記』 〓 初
- 第一種(『世説』とほぼ一致する例) … 総数121
- 郭子 61 語林 31 王隱晋書 4
 - 世語 4 竹林七賢論 4 晋中興書 1
 - 2 竹林七賢傳 2 晋陽秋 2
 - 張敏集載頭賁子羽文 1 桓温平洛表 1
 - 1 荀綽冀州記 1 虞預晋書 1
 - 張勃吳録 1 裴顔別傳 1
 - 衛玠別傳 1 魏志陳泰傳 1
 - 魏志裴潛傳 1 魏志春秋 1
 - 東觀漢記 1
- 第二種(『世説』と語句の一致する例) … 総数75
- 語林 18 郭子 12 王隱晋書 5
 - 竹林七賢論 4 魏志 3 晋中興書 1
 - 2 汝南先賢傳 2 魏氏春秋 2
 - 竹林七賢傳 2 後漢書黃憲傳 1
 - 襄陽耆旧傳 1 海内先賢傳 1
 - 謝承後漢書 1 竹林名士傳 1
 - 袁山松後漢書 1 司馬彪統漢書 1
 - 太傅越与穆及王承阮瞻鄧攸書 1
 - 郭泰別傳 1 蜀志龐統傳 1
- 顧禮之夷甫面贊 1 襄陽記 1
王弼別傳 1 文士伝 1 晋陽秋 1
列仙伝 1 鄒粲晋記 1 李康家誡 1
1 傅子 1 統晋陽秋 1 嵇康別伝 1
管輅別傳 1 千宝晋記 1
晋裴楷伝 1 張勃吳録 1
- 第三種(内容の類似する例) … 総数69
- 晋陽秋 8 語林 7 王隱晋書 6
 - 名士伝 4 魏氏春秋 4 鄒粲晋記 4
 - 竹林七賢論 3 千宝晋記 3
 - 曹嘉之晋紀 2 晋中興書 2 郭子 2
 - 文士伝 2 統晋陽秋 2 八王故事 2
 - 2 蕭広濟孝子伝 1 顧凱之爲父伝 1
 - 漢書 1 七賢伝 1 魏志 1
 - 楚國先賢伝 1 世語 1 漢晋春秋 1
 - 1 山濤啓事 1 張華与褚陶書 1
 - (蔡) 洪与刺史周俊書 1 環濟具紀 1
 - 1 臧榮緒晋書 1 袁山松後漢書 1
 - 江左名士伝 1 文字志 1
 - 史記項羽本紀 1 衛恒四体書勢 1
- 〔注記〕
・それぞれの総数は、一致する文献の数
を指す。

(おかもと ようのすけ) 文学研究科中国文学専攻博士後期課程
一九九九年十月十五日受理